法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-14

金春禅鳳自筆謡本の周辺

石井，倫子

(出版者 / Publisher)
野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
金春家文書の世界 : 文書が語る金春家の歩み（能楽研究叢書 ; 7）
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
94
(発行年 / Year)
2017-03

金春禅鳳自筆謡本の周辺

石井倫子

一、はじめに

金春八郎元安（法名・桐林禅鳳。以下本稿では「禅鳳」で統一する）は享徳三年生。金春禅竹の孫で、世阿弥は母方の曾祖父にあたる。幼い頃から祖父や父宗筠の薫陶を受けていた禅鳳は、文明十二年十一月二十七日に父宗筠が四十九歳で急逝すると、二十七歳の若さで金春大夫を継承し一座を統率することになる。有能な脇師の守菊七郎や従兄弟でもある日吉源四郎を、将軍義政の意向で将軍義政の意向で文明十五年頃に相次ぎ観世座に移籍させられるなど受難の時代もあったが、興福寺官符衆徒の古市氏や河内の畠山義就らの援助により演能活動を続け、義政没後、明応以降は室町殿においても演能の機会を与えられるようになる。管領細川政元や豊後の大内義興らの後援も得た四十才代以降の禅鳳は、永正二年四月の粟田口勧進猿楽をはじめ、京都・奈良を中心にたびたび勧進猿楽を興行するなど盛んに演能活動を行っている。

能役者として活躍する一方で、彼は〈嵐山〉・〈一角仙人〉・〈生田敦盛〉・〈東方朔〉・〈初雪〉など風流能と呼ばれる視覚的で華やかな作品の作者として知られる。また、彼の芸談の聞書『禅鳳雑談』は、彼が素人弟子たちに謡の教授

をする際にいろいろな実技面の心得を教えていた様子を髣髴とさせる。現存する禅鳳筆の謡本や小謡集の存在はそれを裏付けるものであり、禅鳳が幅広い活動をしていたことを教えてくれる。本稿では禅鳳自筆謡本から二つの資料を紹介しつつ、些かの私見を述べたい。

二、宝山寺蔵自筆巻子本〈富士之能〉―改作をめぐって―

(1)禅鳳型と非禅鳳型

宝山寺蔵禅鳳自筆巻子本〈富士之能〉は紙高三〇・〇センチ・全長二〇五・六センチの大型巻子本。詞章の訂正や演出注記なども多いことから、能の台本として書かれたと考えられ、次のような奥書を持つ。

延徳三年辛亥九月三日書之

竹田金春八郎

秦元安（花押）

此富士之能禅竹之作也　多武峯之為に

□(後)をば俄に□(書な?)をし候也　其憚少からず〳〵

本曲の後場の問題については伊藤正義氏ほか先学の研究があり、(1)かつて拙著でも論じたことがあるが、(2)改めて整理しておきたい。

禅鳳は「此富士之能禅竹之作也」と記しているが、世阿弥の音曲伝書『五音（上）』では〈富士之能〉の［クリ］と［クセ］の一部を作詞・作曲者名を付さずに「富士山節曲舞」として引用しており、『申楽談儀』第十一条にも

「げに心なき海士なれ共、所からとて面白さよ」、「面」を持ちて、「白」を拾ふべし。「時知らぬ　山と詠みしも」、かやうの「山」と云所、寄する也。いづれにも渡るべし。かやうの所にて、音曲延ぶ也。富士の能也。

と前シテのサシ謡を引き、「富士の能也」と注記している。禅竹による改作版が存在した可能性も否定はできないが、以上を勘案して「富士の能」は世阿弥原作とするのが適当であろう。『大乗院寺社雑事記』延徳三年十月十四日条には

昨日・今日多武峯八講猿楽在レ之。金晴・金剛。

と、多武峰八講猿楽で金春座と金剛座の立合が行われた旨の記述がある。多武峰八講猿楽では新作能を上演する風習があり、禅鳳はこの立合のために世阿弥作「富士の能」の後場に「俄に」手を入れて〈富士之能〉を作ったと考えられる。

次に示すのは禅鳳自筆巻子本〈富士之能〉の構成である。

1　［次第］［名ノリ］［上ゲ歌］
　唐土せうめい王の勅使せうけい、勅命を受け駿河国富士山に不死の薬を求めに行く。
2　［次第］［サシ］［下ゲ歌］［上ゲ歌］
　海士乙女の登場。
3　［問答］［掛ケ合］［上ゲ歌］
　勅使に富士山の由来を尋ねられ、海士乙女はかぐや姫の伝説を語る。
4　［クリ］［サシ］［クセ］
　海人乙女の語る富士山の縁起と、かぐや姫伝説。

5　［掛ケ合］［歌］

海士乙女は自分こそ浅間大菩薩とほのめかし、再来を約して去る（中入）。

6　間狂言

7　［一セイ］［名ノリグリ］［□］［ノリ地］【楽】

ひのみこの来現。次いで浅間大菩薩（かぐや姫）も顕れ、勅使に不死の薬を捧げて楽を舞う。

8　［（クリ）］

浅間大菩薩の妙なる影向の姿。

9　［ノリ地］

勅使は薬を携えて唐土へ帰り、ひのみことかぐや姫も共に虚空へと姿を消す。

現行曲〈富士山〉は金春流と金剛流の所演曲で、現行金春流は右の禅鳳自筆本と詞章・構成面で大異はないが、現行金剛流（非禅鳳型）は後場第7・8段の構成が次のように異なっている。

7’　〔キザシグリ〕〔ノリ地〕【天女之舞】〔ノリ地〕

ツレ・かぐや姫の登場。ワキに不死の薬を捧げて舞を舞う。

8’　〔名ノリグリ〕〔ノリ地〕【舞働】〔ノリ地〕

後ジテ・火の御子の登場と舞働。

禅鳳自筆巻子本と非禅鳳型の能楽研究所蔵六徳本系金春流謡本の後場で、後シテとツレの登場場面の詞章を比較してみよう。

【禅鳳自筆本】

〈地同音一聲〉A かゝりければ富士のみたけの雲晴て。金色のひかり天地に□(み)ちて。明がたの空はめい〳〵たり。太こあり　日のみこ出べし

〈上〉B抑是□(み)富士山に住で悪魔をはらひ国土をまもる。ひのみこ とはわが事也。

〈ことは〉爰にかんてふ勅使此所に来り。不死の□□(くす)りもとむ。其心さしふかきゆへ。不老不死の仙□□□(やくを)すなはちかれにあたふべしと。

〈同音上〉しんたくあらたに聞しかは。〳〵。こくうにおんがく聞えつゝ。すかたも妙なる かくや姫 の。薬を勅使にあたへ給ふ。ありがたや。〳〵

□山よりせんげん□して仙薬をもちていでゝ勅使に薬をあたへ其まゝがくにてまふへし

〈上〉Cせうちやくきんくここうんの御こゑ。〳〵。あまねしや。〳〵。まことなる□□ふしせんけんの。たゝ今のやうかう。けにも妙□(な)るあ□□(りさ)まかな。

【能楽研究所蔵六徳本系金春流謡本（改訂前※）】

〈上〉a かゝりけれは不二のみたけの雲晴て。まのあたりなる かくや姫 の神躰来現し給へり。

〈上〉実有難や神の代の。〳〵。つきぬ御影をあらはして。不老不死の仙薬を。漢朝の勅使にあたへ給ふ。実有難き気色かな。

〈上〉bせうちやくきんくこ孤雲の御聲。〳〵。あまねしや。〳〵。誠なるかな不二浅間の只今の影向。実も妙なる有様かな。

〈して〉〳〵c抑是は富士山に住て世を守る。ひの御こ とは我事也。

〈同上〉和光同塵あらはれて。〳〵。結縁の衆生。応護の恵。実ありかたやたのもしや。

※貼紙で禅鳳型に改訂。能楽研究所蔵上掛り番外謡本（「柳洞本」）にもほぼ同様の異本書入あり。

禅鳳自筆本Aには「明かたの空はめい〳〵たり」の次に「太鼓あり　日のみこ出べし」とあり、Bひのみこの登場の後「すがたも妙なるかぐや姫の、薬を勅使にあたへ給ふ。ありがたや〳〵」とかぐや姫（浅間大菩薩）が登場し、不老不死の仙薬を持って出て勅使に薬を与え、楽を舞う旨の注記がある。一方の六徳本ではまずかぐや姫が来現し、Bとｃ、Cとｂがそれぞれ対応する形で「ひのみこ」と「かぐや姫（富士浅間）」の登場が逆になっている。三苫佳子氏は六徳本が非禅鳳型から禅鳳型に修正されていることや、非禅鳳型の後場が〈老松〉〈難波〉などの後場と同様の構成であることから、これが禅鳳改作以前の世阿弥作「原・富士山」ではないかと推測している。[3] 確かに世阿弥は〈難波〉や〈泰山府君〉のように男女二体の出物が登場する能を作っている。しかし神能においてはとりわけ「本説正しき」ことを重視している世阿弥が、前場で全く言及のない「ひのみこ」をいきなり後シテとして登場させるのは不自然と言わざるを得ない。かつて西野春雄氏は小段構成や舞事の特徴から非禅鳳型への改作者として信光の可能性を提示されたが、[4] 当時金春座が有能な脇師の守菊や日吉が将軍の命によって観世座に移籍させられて大打撃を蒙っていたことなどからすると、この両者の間で改作が行われたと考えるのは躊躇される。

『自家伝抄』『能本作者註文』で禅竹作とされ、永正十一年十月二十八日に南都雨悦びの能での上演記録のある〈矢立賀茂〉（〈賀茂〉）は、前シテ・御祖神の化身の水汲女がツレを伴い登場、後場では御祖神は後ツレとなり新たに別雷神が後シテとして登場するという非禅鳳型「富士山」とも通ずる構成を持ち、「世阿弥風の女体神能とは異なる様式の女神能としてはかなり初期に属する」「禅竹の開拓した新風」との伊藤氏の指摘[5]もある。「此富士之能禅竹之作也」という禅鳳自筆巻子本の奥書を信ずるならば非禅鳳型こそが禅竹作「富士之能」であったという仮説も成立し得るが、〈矢立賀茂〉の後シテ・ツレの配役が本来のものかどうかは検討の余地があり、

世阿弥原作→禅竹改作（非禅鳳型）→禅鳳改作

のような二段階の改作を考えた場合、「ひのみこ」と「かぐや姫」の登場順を逆にしただけともいうべき改作を禅鳳が多武峰で準新作として演じたとは些か考えにくい。以上から、本稿では非禅鳳型の問題は一旦措き、世阿弥の原〈富士山〉から禅鳳型への改作の問題のみを扱うこととする。

⑵原〈富士山〉再考―素材の再検討から―

世阿弥の〈富士山〉はどのような後場の神能だったのか。この問題を考える上で重要なのは、かぐや姫や富士山にまつわる伝承が集中して語られる前場の**第3段**、**第4段**である。禅鳳自筆本は損傷が激しく解読不能の箇所が多いので、ほぼ同文と認められる金春宗家蔵・金春八左衛門安喜自筆謡本により当該箇所の詞章を示す（便宜上私に表記を改めた）。

第3段［問答］

a／昔唐の方士といつし者此富士山にのぼり。ふしの薬をもとめゑたるためしあり。吾もそのゆいせきを尋て是までき たりたり。そのゆいせきはしり給へりや　／実々さる事ありしなり。bむかし鶯の貝子けして少女と成しを。時の御門の皇女にめされしに。時至りけるか天にあがり給ひし時　形見の鏡に不死やくをそへてをき給ひしを。後日に富士のたけにして。その薬を焼きしよりふしの煙はたちし也　〈つれこゑ〉／しかればc本号はふしせんなりしをこほりの名によせて。富士の山とは申なり。是蓬莱の。仙郷なり

第4段［クリ］［サシ］［クセ］

〈上〉抑此富士山と申は。d月氏七嶋の大山。天竺より飛びきたる故に。則新山といふとかや。

〈さしこゑ〉 e頂上は八葉にしてうちに満池をたゝえたり。f神仙人外の境界として。四季折々を一時にあらわし。天地陰陽のつうだうとして。稀代の霊験。他にことなり。

〈下〉をよそ富士の根は　年に高さやまさるらん。きへぬが上につもる雪の。見ればこと山のたかね〳〵をつたひきて。富士のすそ野にかゝる雲の上は晴て青山たり。いづくより降るやらん雲より上の白雪。しかればg此山は仙郷隠れ里の人間にことなるその瑞験もまのあたり。h竹林の王妃として。皇女にそなわりて鏡に不死薬をそへつゝ別るゝ天の羽衣の。雲路に立帰りて神と成給へり

〈上〉i御門その後かぐや姫の教へに従ひて。富士のたかねの上にして。不死の薬を焼き給へば。煙は万天に立ち上りて。雲霞逆風に薫じつゝ。日月星宿もすなはちあらぬ光をなすとかや。さてこそにjもろこしの方士も此山にのぼり不死薬を。もとめゑて帰るなれ。是我朝の名のみかは。西天東土扶桑にも並ぶ山なしと名を得たる。富士山のよそをひ真に上なかりけり

ここで語られる傍線部a～jの富士山伝説は、次の①～④の素材に大別できる。

①《徐福不死薬伝説》―a・j

②《鶯姫伝説》―b・h・i

③《富士山仙郷伝説》―c・f・g

④《富士山新山伝説》―d・e

①は史記にもみえる伝説だが、徐福はついに不死の薬を求めることができなかった／帰って来なかったという失敗譚が多い中で、次の**【資料A】**は漢朝の方士がこの山に来て不死の薬を求めたと〈富士之能〉同様の不死薬伝説を記す。

【資料A】由阿『詞林采葉抄』

……仍て此山をは不死山と云けるを、郡の名につきて富士と書る也。或記曰、此山蓬莱也。昔漢朝之方士此山来、求二不死薬一。古老伝云、秦二世皇帝皇子伴方士、此山隠里来住。

②はかぐや姫が竹ではなく鶯の卵から生まれているのが特徴である。『竹取物語』とは別系統のかぐや姫の話は中世古今注の中で語られるが、[6] 松岡心平氏の指摘にあるように『臥雲日件録抜尤』でもこの鶯姫説話が披露されている。[7]

【資料B】瑞渓周鳳『臥雲日件録抜尤』文安四年二月二十日条

城呂頗能二和歌一。問レ之歌人例有二富士之烟之語一。来由如何。呂云。昔天智天皇代富士山下市。常有二老人来一。賣レ竹。人怪レ之。一日行尋二其皈處一。富士山中一村翁。家有二處女一太艶美。翁曰女初於二鶯巣中一。得二一小卵一。々化為二此女一。……此事聞二于朝廷一。勅求二此女一。終納為二帝妃一。名曰二加久耶妃一。々一日白レ帝曰。妾以レ有二夙縁一。来侍二左右一。今當レ皈二天上一。因出二不死薬一。天葉衣乃粧鏡奉レ之曰。若見レ思レ妾。則可レ見二此鏡一。々中必有二妾容一。言畢不レ見。後帝披二天葉衣一飛去。到二富士山頂一。於レ此焼二不死薬與一レ鏡。其烟徹レ天。凡歌人所レ因本二於此一也。富士又曰二不死一。蓋由レ此也。

和歌に堪能な城呂という座頭に「富士之烟之語」について尋ねたところ、「富士山中に一人の翁がおり、その翁が鶯の巣の中で見付けた一つの卵を得たところ、卵が美女になった。後に帝がこの話を聞いてこの女を差し出すように勅命を下したので、帝の后として入内させた。名をかぐや姫という。ある日かぐや姫は帝に「自分は縁あってあなたのお側にお仕えしたが、今は天上に帰らなくてはならない」と言い、自分に逢いたいならこの鏡を見るようにと鏡に不死の薬と天の羽衣を添えて姿を消した。帝は羽衣を着て富士山頂に到り、この不死の薬と鏡を焼いた。その煙は天に立ち上った。これが歌人が本説とする〈富士之煙〉の話である」と語ったという。傍線部から、この伝説が歌人達

の間で共有されていたことが強調されている。

【資料C】 衲叟馴窓『雲玉和歌抄』永正十一年

（前略）富士のかぐや姫の事、日本記注に欽明天王、詞林最要（ママ）には桓武天王、何れも不審に存ずる、欽明は聖徳太子の御祖父、かの姫と契りて後思ひにしづみ給ひし、不死の薬やけしより内院の煙たつと申す、太子、黒駒にめして彼山にのぼり御あとを問見給ひし、赫姫内院へ帰りて御門へ不死薬まゐらせ給ふ時、御歌今はとてあまのはごろもきる時ぞ君をあはれとおもひいでぬる（三八九番歌）

不死の薬も用なしとて返し給ひて

君こふる涙にしづむうき身にはしなぬくすりもなににかはせん（三九〇番歌）

関東歌人衲叟馴窓の私撰集『雲玉和歌抄』は「富士のかぐや姫の事」として日本紀（古今注）や『詞林采葉抄』に言及する。不死の薬を焼いてから富士山内院の煙が立つこと、赫奕姫が内院に帰り、帝に不死の薬を献じたことなどが詞書に記されているが、三八九番歌で「あまのはごろも」と詠まれていることも〈富士之能〉との近さを感じさせる。

③は富士山は神仙人外の境界、仙郷の隠れ里であるという富士仙郷説である。

【資料D】 都良香『富士山記』

富士山者、在二駿河国一。峯如二削成一。直聳屬レ天。其高不レ可レ測。……蓋神仙之所二遊萃一也。承和年中。従二山峯一落来珠玉、玉有二小孔一。蓋是仙簾之貫珠也。又貞観十七年十一月五日、吏民仍レ旧致祭。日加レ午天甚美晴、仰二観山峯一。有二白衣美女二人一、双二舞山巓上一。去レ巓一尺餘。土人共見。古老傳云、山名二富士一。取二郡名一也。山有レ神。名二浅間大神一。……山東脚下。有二小山一。土俗謂二之新山一。本平地也。延暦廿一年三月、雲霧晦冥。十日而後成レ山。蓋神造也。

【資料E】『富士山縁起』

此山半腹ヨリ下、大樹梢ヲ争イ、枯木枝ヲ鳴ラシ、上ハ草木生イル無シ。木山ノ深洞ニ仙人ノ栖有リ。深ク信有ハ仙術ヲ得、故ニ仙人山ト號ス。（中略）信心スルコト厳重ニ於テハ、長生不老ノ齢ヲ保ツ。故ニ養老山ト號ス。

【資料D】は〈富士山〉を「神仙の遊萃する所」とし、「白衣美女二人」が山上で並び舞ったと記し、さらに郡の名に因んで山の名を富士ということや、山の東の麓にある小山を新山と呼ぶ由来、富士山に浅間大神という神がいることなども語られる。【資料E】でも「仙人ノ栖アリ」「信心スルコト厳重ニ於テハ、長生不老ノ齢ヲ保ツ」と述べており、不老不死の薬につながる仙郷意識をみることができる。

④は富士山は月氏七島の第三で、天竺から飛来したために「新山」と呼ばれるという飛来伝説で、富士山の頂上が八葉で内に満池を湛えていると語られることが多い。

【資料F】金沢文庫蔵『富士縁起（断簡）』

……延暦廿四年巫女ニ託シテ曰ハク内ニハ秘ス深妙ノ之□位ヲ大日覚王之身是ナリ外ニハ現ス和光之塵形ヲ我号ス浅間大明神ト間、浅智之衆生ニ導ク難化ノ之輩ヲ義ナリ也……是愛鷹ノ之明神也ナリ嬢者又飼ノ犬之明神也二□□新山ニ依テ因位ノ所愛ニ以テ為ス其ノ名ト而テ嬢ヲハ勧請シ名ク新山宮ト□奉勧請シ不改其ノ名ヲ新山者ハ烈擲ノ五年ノ暮春之比自ヨリ天□来故ニ名ク新山ト……□夜□有テ光明自リ地中出而ニ遥ニ照ス生ルニ奇特ノ之思ヲ其夜夢想青衣ノ天女持テ手ニ寶珠ヲ白雲ニ来テ告テ聖人ニ曰ク□是浅間大菩薩也ナリ所現ノ瑞相ハ者般若山ノ精大日如来ノ三□耶行此ノ處ニ御坐ス故也云々……

【資料G】『詞林采葉抄』

富士縁起ニ云、此山者月氏七島之第三也。而ニ天竺列擲三年ニ我朝ニ飛来ル故ニ云新山。本ハ号般若山。其形似合蓮華頂上八葉也。中央ニ有大窪、窪ノ底湛ヘ満池、水色如青藍、味甘酸シ。治諸ノ病患……

【資料F】は前半が欠落しているものの現存最古の『富士縁起』で、『竹取物語』の中世的受容・展開を示す貴重な資料で、

・かぐや姫伝説（竹取の翁は「愛鷹明神」、姥は「犬飼明神」とされる。またかぐや姫は月ではなく般若山（富士山）に戻る）

・延暦二十四年、巫女による浅間大明神の神託。少女が浅間大明神の化現であったこと。

・般若山は列擲五年の春天竺から日本に飛んできたため「新山」の名で呼ばれるようになったこと

などが語られている。【資料G】でも「富士縁起に曰く」という形でこれとほぼ同様のかぐや姫伝説を引き、富士山は月氏七島の第三で列擲三年に日本に飛来したため新山と呼ばれること、その形は蓮華に似ており頂上は八葉、中央には大きな凹みがあり、凹みの底には池を湛えていることを語る。

【資料H】金沢文庫蔵『浅間大菩薩縁起（残欠）』

風ニ聞ク月氏国ニ有ニ一ノ嶋一、皆奉シレ禘シ鎮ニ守ス諸神ヲ一、然ル間、夜中ニ一嶋辺失畢ヌ、成ノレ奇ヲ令ムルニレ尋ネ二東西南北ヲ一、渡テ二日本国一、東海道駿河ノ国ニ顕二浅間大明神ト一給フ、是レ、震旦文殿ノ之日記ニ注シ置ケルナリ也、古老伝云ク、山ヲ名クルハ二富士ト一者取ルニ郡ノ名ニ一也、山ニ有スレ神、名ク浅間大明神ト一……

本縁起の成立は鎌倉時代中頃を遡るとされるが、ここでも同様に月氏国の一つの島が夜中に突如として失せて日本に渡来し、駿河国の浅間大明神と顕れたこと、郡の名に因んで「富士山」と名付けたことが語られる。

【資料I】妙本寺蔵『当家聞書』文明五年

……天竺ニ七嶋トテ七ノ嶋アリ。其中ノ□嶋即船山共云也。彼山俄ニ震動スルコトナルカミイカツチノ如シ。諸人不思議ニ思フ處ニ彼山ヌケ挙テ紫雲ニ乗ル。……ハヤ天竺ヲ飛ヒ過テ唐土へ飛渡ル。……去程ニ此紫雲ハ唐土

へ可落着クカト覚エ候ヘハ、サワナクテ日本ヲ指テ飛ヒ行ク。其比唐土ノ年号ハレッテキ三年三月ノ時分也。即日本ニ飛渡リテ南海道西海道九重ノ都アタリカト思フ處ニモ飛過キ、東海道七ヶ国ヲモ飛過カト思ヘハ、駿河国富士ノ郡ニ彼山飛付也。其比日本ノ王は香礼天王ノ時也。……富士ノ在所ノ名ニヨリエテ富士山ト云。本名ハ大日蓮華山ト可名付シ。

右はやや時代が下るが、これも傍線部のように「天竺に七つの島があり、その中の一つ船山が列擲三年三月、突然紫雲にのって唐土を越え日本に飛来、駿河国に着いた。在所の名によって「富士山」と名付けた」とあり、富士山天竺飛来説話が富士縁起を通じて広く流布した様子が推測される。

亡父にて候ひし者は、五十二と申しし五月十九日に死去せしが、その月の四日、駿河の国、浅間の御前にて法楽仕り、その日の申楽、殊に花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。（『風姿花伝』第一年来稽古条々）

観阿弥が至徳元年四月に最後の舞台を勤めたのが駿河国富士浅間神社であった。富士山は世阿弥にとって父にゆかりの思い入れのある土地であり、富士縁起に触れる機会も少なからずあったに違いない。

以上の素材の検討を通じて、

A古今注をはじめとする和歌世界における富士山伝説

B富士山縁起の類

これら二系列の伝承が取り合わせられて作られたのが世阿弥作〈富士山〉であることを確認した。

それでは、原〈富士山〉の後場はどのようなものであったのか。先掲富士山縁起関係資料の中には「浅間大神」「浅間大明神」の名を記すものが散見し、**【資料F】**に至っては「青衣ノ天女」が自ら「浅間大菩薩也」と告げている。今川範政『源氏物語提要』（永享四年）「絵合」巻で『竹取物語』のかぐや姫による難題譚に続けて

帝聞召し都へめして后にそなへ給ふ。此御門を欽明天皇と申奉る。此翁ふしの山に住しに、后つゐに御暇を申てふしの麓に帰り給ふ。みかと御名残をしみ恋慕給ふ。姫は不二の山より天女となりて上り給ふ。是則、不二浅間大菩薩也。

と「かぐや姫＝天女＝浅間大菩薩」と説いていることも、かぐや姫浅間大菩薩同体説が流布していたことの一証左たり得よう。世阿弥が、

脇の申楽、序なり。直なる本説の、さのみに細かになく、祝言なるが、正しく下りたるかかりなるべし。

（『花鏡』）

と、繰り返し脇能における「本説」の重要性を説いていることを踏まえるならば、世阿弥原作〈富士山〉の後場は、かぐや姫が浅間大菩薩として顕れ、不死の薬を勅使に捧げて天女舞を舞うという形式の女体神能であったと考えるのが自然である。

『看聞日記』応永二十三年三月七日条には次のような記事がみえる。

七日。晴。順事茶御会。……次風流之懸物自南面門舁入広廂置之。先大黒天神。……次富士山〈大伏籠ヲ紙ニテ張。山ヲ色トリテ、麓ニ小松ヲ栽。山ノ頂ニ綿ヲムシリテ懸如雪。富士ノ中ニ種々菓子積置〉。次橋〈高欄アリ橋ノ下ニ水ヲ絵ニ画。此下ニ捶二置之〉。橋上ノニ新鋸置之〈各以木作之〉。此心古今序富士山モ煙タ、スナリ。長柄ノ橋モ作ナリ云々。以上三位所進也。凡風流共言語道断驚目了。男女庭上見之。

茶会の懸物として「古今仮名序」の「今は富士の山も煙たたずなり、長柄の橋もつくるなり」を踏まえた富士山と長柄の橋の風流が設えられたというのである。大きな伏せ籠を紙で貼り、色を塗り、頂上に綿を雪のように懸けた富士山を作り、その中にさまざまな菓子が入れてあったようだが、この賭物は結局義持の手に渡ったと貞成親王は記して

いる。

ちなみに世阿弥の時代、足利将軍の富士遊覧は義満が嘉慶二年九月、義教が永享四年九月、都合二回行われており、いずれも遊覧を名目とした政治的デモンストレーションであったとされる。前者は観阿弥の亡くなった四年後で世阿弥二十六歳、後者は元雅を失って間もない頃なので、世阿弥が直接的に彼らの富士遊覧に当て込んで〈富士山〉を作ったとは考えにくいが、富士山の仙女が勅使に不死の薬を捧げるというストレートな祝言性は、原〈富士山〉の作意や成立の場を考える上で非常に重要である。

(3)改作〈富士之能〉がもたらしたもの

〈富士之能〉後場で突然姿を現す後シテ「ひのみこ」は番外曲〈生贄〉では「富士権現のつかはしめ」つまり護法的存在として登場し、「日の御子」「火の御子」と表記の揺れはあるものの、富士修験関係の資料の中にその名を見いだすことができる。

ア　浅間大菩薩ハ惣本地大日如来、一千二百余尊。胎蔵ハ八葉ノ曼陀羅…中央金胎両部大日如来、山ノ四方ハ四大明王……日ノ御子ハ金剛四菩薩、鳥居ハ日光月光……（『富士山縁起』）

イ　亦神女二人出現シ、双ビ立テ舞ヒ遊ビシ後炎烟ノ如ク失セ給フ。火ノ御子ト号シ本地ハ如意輪観世音菩薩也。（同右）

ウ　その中に火の御子と申たてまつるは、仁王五十六代清和天皇の御宇、貞観五年、癸未の秋、富士の山頂に白き衣の天人天下り、峰を去ること一尺ばかりにして、二人しばらく舞ひ遊び、光天に満ちて、円光火炎の如く見え給ふ。それより此所を、火の御子とは申奉る。（『富士山の本地』）

エ　日神子ハ伊弉諾・伊弉冊二神御坐カ故ニ、名二金胎両部峰一。　（『富士山縁起状』）

また『神道集』「富士浅間大菩薩事」では、かぐや姫を寵愛していた国司が富士山の頂上にある大きな池の煙の中に幽かに姫の姿を目撃し、姫恋しさの余り煙の中へ身を踊らせ、それ以来煙は消えず不死の煙（富士の煙）と呼ばれると語り、「其後赫屋姫ト国司トハ神ト顕テ、富士浅間大菩薩ト申ナリ。男体女体御在ス」とかぐや姫と国司が富士浅間大菩薩と顕現したとする。ここでは富士浅間大菩薩が男女二体とされている。『地蔵菩薩霊験記』にも浅間大菩薩は「男体ニ顕玉フベキニ女身ニ現ジ玉ヘリ」とあり、妙本寺本『曽我物語』も同様の記述が見えることから、浅間大菩薩男女両体説が存在していたことが明らかである。禅鳳が修験道的な素材に関心を寄せていたことについてはかつて拙者で論じたが、〈富士之能〉においても富士縁起にみられる両体説が「悪魔を払い国土を守る」富士山神としての「ひのみこ」と浅間大菩薩（かぐや姫）の男女二体の神という後場の構想に大きな影響を与えたものと考えられ、本来この作品が持っていた祝言性にさらに風流性を加えることとなったのであった。

般若窟文庫には元禄十年金春七郎元喜筆の『富士山子方仕舞付』という型付がある。

一　後して先へかくや姫。頭ゟして出る。舞臺内ニ入大の先ニ立いる。

一　出テすかたもたへ成とひらき

一　薬をちょくしと脇へ渡て□（はが、）り三段之舞。左右にて留ル。

一　せうちやくきんくこウンのこゑとうたひ返しゟ正面へ出。富士浅間のたゝいまのやうがうとてしてへあいしらいしてと入替り太コのの先へつくはい□

一　かくや姫ハとわき正面の方へ出。しうんにせうしと左へノリ、二三ひやうし。ふじのたかねに□申候。

同じく般若窟文庫蔵『子方仕舞付』の〈富士山〉にも「太コ一セイにてシテの先ニ立、薬袋目八分ニ持テ出」とある。

禅鳳自筆巻子本の演出とは異なりかぐや姫が後シテと共に出てくるのであれば、相対的にかぐや姫の比重が軽くなるので、ツレではなく子方でも十分演じられる。禅鳳作の〈一角仙人〉の龍神を子方で演じたりツレで演じたりすることがあるが、これと同様の演出の広がりが改作後の〈富士山〉でもあり得たのである。禅鳳が〈富士之能〉を女体神能から男女二体の神の登場する風流能へと改変したことで演出の幅が広がり、子方を重用した禅鳳が好みそうな演出も可能となった。祝言性に風流性を大幅に加味した風流的神能が、後の時代になって先祖返り的な演出をもたらした興味深い事例といえるだろう。

三、元安自筆小謡巻子本――〈千手〉の周辺

(1)禅鳳と小謡

本節では能楽研究所の所蔵となった元安自筆小謡巻子本を紹介する。前述〈富士之能〉のように視覚的なインパクトの強い風流能の作者として知られる禅鳳だが、彼自身は謡を重視していたことが伝書から知られる。

a『五音之次第（元安本）』（永正八年八月二日　七郎氏昭宛）

①能は音曲より出たる物にて候。むかしより、音曲の上手の能せぬ者候とも、能之上手に音曲のへたはあるべからず候。音曲は拍子より出たる物にて候間、音曲・能、共に拍子肝要にて候。

世にひろく五音又は音曲の大事などゝて人のもち候へ共、音曲のよきをば更々聞ず候間、一大事之物と存候。大かたのたしなみにては難レ成候。朝夕仏神に祈、立にも居にもわすれずしてなげきたしなみ、一大事と思ひ給候はずはなるまじく候。

②祝言の謡をよく心がけて、心にうかぶほど稽古候て、四音を稽古あるべく候。皆々、下地は祝言の心得にて候。祝言の謡の稽古疎かに候はゞ、惣の謡、皆弱くあるべく候。

b『音曲五音』（永正十三年極月廿六日　新屋左衛門五郎宛）

③先々、祝言の謡を本に御たしなみあるべく候。いづれの音曲も、祝言より出でたる物にて候。直ぐに正しき方を本に御たしなみあるべく候。

④謡を多く覚ゆる事、丸本などを御好き候て御うたひ候事、返々然べからず候。よき謡を少なく覚えて、細々に稽古候事、肝要にて候。

aは息子の七郎元昭宛、bは素人弟子の新屋左衛門五郎宛の伝書であるが、能の基本は音曲であること（①）、全ての音曲は祝言謡の「下地」であるので、祝言謡の稽古を基本にすべきこと（②③）に加え、④では謡は数多く覚えたり、謡本一冊を覚えたりすべきではなく、数は少なくても良い謡を丁寧に細かく稽古することこそが肝要だと説いている。ややもすると数多くのレパートリーを謡えるようになりたがる素人弟子に対して、「丁寧に、徹底的に」をモットーに稽古を行おうとする指導者としての禅鳳の姿勢が垣間見える。

素人弟子の藤右衛門が永正十年前後に見聞した禅鳳の芸談をまとめた『禅鳳雑談』にも、小謡に関する禅鳳のコメントが残されている。

c『禅鳳雑談』

⑤謡の節、多くはなし。十ばかりあり。小謡の一つのうちに悉くあり。

⑥野宮のやうなる謡を一つ、よくかけひきをろく〳〵に習へば、ことぐ〳〵く行くなり。又、祝言をはじめて、五音ことぐ〳〵く節は同じくして変る事なし。

⑦……其間の雑談に、いつも申ことなれ共、祝言の謡をわれらに謡ひ候へと申され候。何の曲へもわたりて、強く位良きと申事候。謡弱く候ては曲なく候由、いつも被ㇾ申候。幽玄・哀傷の心の位を、祝言には交へざるがよく候。

ここで禅鳳は、

・一つの小謡の中に謡の節は全て含まれる。

・〈野宮〉のような謡を十分に習えばそれだけで全てに応用が利く。

・とりわけ祝言の謡をしっかり稽古することが大切である。どのような曲に対しても「強く、位良き」ということが肝要で、謡が弱くては面白くない。

と述べている。

禅鳳の有力なパトロンで謡の弟子でもあった興福寺官符衆徒の古市澄胤について、春日大社の社家出身の茶人久保利世は『長闇堂記』に「謡は曲舞、只三番の外は知り給はねども、京より南になき謡のよし云伝なり」と記している。曲舞三番以外謡を知らないというのはさすがに誇張であるにしても、これは「よき謡を少なく覚えて」稽古せよという④の主張に合致する。また、般若窟文庫蔵坂東屋殿宛禅鳳筆小謡本の写しの所収曲（〈人形之祈〉〈藤栄〉〈杜若〉〈ゆつりは（淡路）〉〈不動〉〈水無月祓〉〈鞍馬〉〈稲荷〉）が、福島和夫氏蔵長松殿宛小謡本の所収曲（〈水無月祓〉〈鞍馬〉〈稲荷〉〈人形〉〈藤栄〉〈杜若〉〈ゆつりは〉〈不動〉）とほぼ重なることも「よき謡を少なく」という禅鳳の主張を裏付けるものである。

⑧子年（永正十三年）五月廿六日に、与四良方ハ来臨、五つの小謡書候て給候。一番、野守の小謡、少うたいよきうたいとて、機嫌よく候。さてまた何をと被ㇾ申候。「それ世間の無常」（初瀬六代）と所望候。申候處に、我も

それにてあるべきと思ひ寄り候と被申候。さて又五つめに、祝言を好み候へと被レ申候間、さらば龍神（春日龍神？）の小謡と申候。あらふしぎや、是も思ひ寄り候とあり。則、判をと申沙汰候て、給候。やがて其まま習ひ申候。よき謡共、是を謡い候はゞ、何もよくあるべき由被レ申候。

『禅鳳雑談』には⑧のように小謡が実際にどのように教えられていたかを示す記事も散見する。[8] 禅鳳は一方的に謡を選んで素人弟子に稽古を付けていたわけではなく、弟子に稽古をしたい曲目を挙げさせ「その謡は良い」とか「自分もその謡が良いと思った」などとコメントしながら小謡集を書き与え、それを用いて謡を教えていたのである。

(2)〈むかしうたひ〉と〈千手 むかしの能〉

能楽研究所蔵元安自筆巻子本には〈右近〉〈反魂香〉〈花形見〉〈おはすて〉〈むかしうたひ〉〈千手 むかしの能〉〈四季祝言之内〉七つの小謡が記されており、巻末に「竹田金春　秦元安（花押）／宮田下野守殿まいる」と奥書がある。出家前の禅鳳が宮田下野守なる人物に相伝したものであることがわかる。宮田下野守について詳細は不明だが、この巻子本の丁寧な筆致や装幀を考えると、禅鳳にとって有力なパトロンの一人ではあったのだろう。以下に各小謡の翻刻を示し、備考を付す。

右近

〈下〉花見車の八重
ひとへ見えて桜の
色々に。〈上〉ひおり

せし右近の馬場
の木のまより。〳〵
影もにほふや朝日
寺の。春の光(しほる)も
あまみてる神の
みゆきのあとふり
て。松もこたかき梅
かえの立枝も見えて
くれなゐの。初花
車めくる日のなか
えや北につゝく
らむ〳〵

【備考】

〈右近〉（〈右近の馬場〉）の［下ゲ歌］［上ゲ歌］。〈右近〉は『五音曲条々』に

一、幽曲ノ音曲、本声ノ姿〈幽曲ハ五音通曲風也〉

「ヒヲリセシ、右近ノ馬場ノ木ノ間ヨリ」ノ謡ノカヽリ、是幽曲也。凡、応永年内ヨリ以来ノ謡イ物、ミナ〳〵幽曲ナリ。コトゴトクハ記スニ不レ及。

『五音之次第』「幽曲」は

［指声］おもしろや時もところもあいにあふ。こや九えの花見月。きせむのくんじゆも袖をつらね。もすそをつぎてはなごろもの。日もうららなる春霞。まつにたなびくしめ野、原のみどりの空にうつろいて。宮路たゞしきうち野のしばふ。つきぬ御代とてのどけさよ。

に続けて当該箇所を引く。

反魂香

〈下〉夕月影の西の
空山又山をはる
はると。〈上〉思ひたつ
旅のころものうら
かけて。〳〵野にも
山にも行路の。末は
またしき宿（しほる）〳〵の
かりなから夢の草
枕。むすひかへたる
袖の露。おなし
命の身の行衛
そこともしらぬな

らひかな〳〵

【備考】

〈反魂香（不逢森）〉［下ゲ歌］［上ゲ歌］。『歌舞髄脳記』（草稿本）に「不逢森」の曲名が見え、『五音三曲集』「哀傷第二　物哀体曲味」では「骨味」として本曲の［クセ］が引かれる。禅竹作か。

花形見　文

〈さしこゑ〉我応仁天皇の
そむへうをつき
なから。ていゝをふむ
身にあらされとも。あま
てるおほむかみの神
孫なれは。毎日に伊勢
をはひしたてまつりし。
其しむかんのいたり
にや。くむしんのえらひ
にいたされていさ
なはれ行雲の
うへ。めくりあふへき

月影を。秋のな
のみにのこすなり。
〈下〉たのめたゝ袖ふれ
なれし月影の。しはし
雲ゐにへたてあり
ともと。〈かゝる〉かきとめ給ふ
みつくきのあとにのこる
そかなしき。〈上〉君と
すむ程たにありし山
さとに。〳〵ひとりの
こりて在明のつれ(しほる)
なき春も枕まふく
松の嵐をいつしかに。
花のあとゝてなつかしき
御花形見玉章を
いたきてさとにかへり
けり〳〵

【備考】

〈花筐〉［文］［下ゲ歌］［上ゲ歌］。『五音（上）』に作詞作曲者名なしで

花形見

ワレ応神天皇ノ

と当該箇所の冒頭が引かれ、『五音三曲集』「幽玄第四 遠白体曲味」は「肉味」として本曲の［サシ］［下ゲ歌］［上ゲ歌］を引く。『五音之次第（元安本）』は「第三恋慕」として第五段［下ゲ歌］［上ゲ歌］を引く。

おはすて

〈上〉さかりふけたる女郎

花の。〳〵草ころもし

ほたれて。むかしたにしの（すて）

はれし程（しほる）の身を（ら）

しらて。又おはすての

山に出て。おもてをさら

しなの月にみゆるも

はつかしや。よしや。何ことも

夢の世の中〳〵いはし

おもはしな。思ひくさ花

にめて月にそみて

あそはむ

【備考】

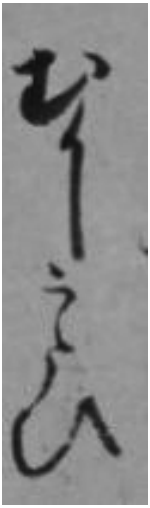
〈姨捨〉八段［上ゲ歌］。『申楽談儀』第二条に

姨捨の能に、「月に見ゆるもはづかしや」、此時、路中に金を拾ふ姿有。

とあり。

むかしうたひ（ア）

〈上〉忍ふれと色にてに
けり吾恋は。〈〈
物や思ふと。人のとふ
まてはつかしのもり
ける袖の涙かな。実
やこひすてふ。わか名は
またき立けりと。人
しれさりし心まて思ひ
しられてなつかしや〈〈



【備考】

『五音曲条々』「恋慕」に

「忍ブレド、色ニ出ニケリワガ恋ハ」ノ謡、恋慕ノ本懸也。

『五音之次第』「恋慕」に

（詠曲）（上うたふ）忍れど、色に出にけり我がこひは、物や思ふと人のとふまではづかしの、もりける袖の涙かな。げにや恋すてふ、わが名はまだきたちけりと、人しらざりしこゝろまで、おもひしられてなつかしや　〳〵

『閑吟集』２６５にも最後が「恥づかしや」の形で引かれており、独立の謡い物であったと考えられる。

千寿　むかしの能（イ）

〈上〉行衛もしらぬわか心。〳〵

けにもおよはぬ恋

とて。よそめにもはや

しら雪の。富士の煙

より吾名の立そか

なしき。けにやなから

の橋はしら千たひ

もゝよをふるとても。

誰にちきりをかけ

てまし。あちきなの

憂世や。あらあちき
なのうきよや

【備考】

岩国徴古館蔵車屋混五番綴謡本〈千手〉の末に「昔の上歌」としてこの謡を引く（参考・西野春雄「謡曲改作史の一断面」『能楽研究』6号）。また上杉本乱曲集は〈煙見千寿〉として右の「むかしうたひ」に続けてこの謡を引く。詳しくは後述。

四季之祝言之内

〈上〉いさこゝに吾世そ経
なむすかはらや。〳〵
伏見のさとに久堅の。
天照日も影ひろき
水穂の国はゆたか
にて。民の心もいさ
みある御代のおさめは
ありかたや〳〵

【備考】

『五音』上「祝言」は〈足引山〉として、

［指声］足引ノ山下水モ絶エズ、浜ノ真砂ノ数積モリヌレバ、今ハ飛鳥川瀬ニナル恨ミモ聞エズ、サヾレ石ノ岩ホトナル悦ノミゾアルベキ、然バ天ニ浮カメル浪ノ一滴ノ露ヨリ起リ、山河草木恵ミニ富ミテ、国土安穏ノ当代ナリ。

に続けて本曲を引く。『音曲口伝』は「祝言」、般若窟文庫蔵金春安喜筆らしき「小謡・曲舞」は「四季之祝言」、上杉本乱曲集『四季祝言之内』として、いずれも［サシ］から引く。

（イ）以外は全て世阿弥・禅竹の伝書に言及があり、禅鳳が謡い物としては比較的ポピュラーな曲を選んで書き与えたことがわかる。また、前述の坂東屋殿・長松殿宛小謡巻子本には「人形之祈」という長い謡い物があるのに対して、こちらは個々の謡が短いのも特徴的で、禅鳳が相手のレベルによって教える曲や謡の長さなどを按配していた様子が窺われる。

ここで（ア）（イ）の二曲について改めて検討してみたい。

（ア）はもともと独立の小謡であった。（イ）は「むかしの能」と注記があるように、禅竹作とされる現行曲〈千手〉にはみられない詞章である。身に及ばぬ恋をした自分の心はよそ目にも知られるようになり、富士の煙が立つよりも浮き名が立ってしまったことが悲しい。長柄の橋のようにいつまで長らえても誰に契りをかけることができようか、と叶わぬ思いの相手への恋慕の情を切々と語っているが、実はこれは西野春雄氏が紹介された岩国徴古館蔵車屋混五番綴謡本〈千手〉の末に記されている「昔の上歌」と同文である。[9] また『上杉本乱曲集』〈煙見千寿〉は（ア）に続けて（イ）を引く。

煙見千寿

〈上〉しのぶれど　色に出けりわがこひは。物や思ふと。人のとふまではづかしの。もりける袖の涙かな。げにやこひすてふ。わが名はまだきたちけりと。人しれざりし心まで。思ひしられて夏かしや　〳〵

〈上〉ゆくゑもしらぬ吾心。〳〵　実も及ばぬこひすとて。よそ目にもはや白雪の。ふじのけぶりより　わがなの立ぞ悲しき。実やながらのはし柱。千たびも、よをふるとても。たれに契をかけてまし。あぢきなのうき世やあらあぢきなのうき世や

片桐登氏は〈煙見千手〉は「完曲の詞章中の二つを並べたもの」とした上で現行曲〈千手〉の後日談のような内容を想定され、[10]表章氏は『五音（上）』所引〈千寿〉の「サテモ本三位ノ中将」という謡い出しがすでに亡き重衡の事を語る語り口であることに着目し、幽霊能形式の散佚曲が存在していた可能性を指摘、それが〈煙見千寿〉ではないかと推測された。[11]天野文雄氏も（ア）（イ）ともに世阿弥作〈千寿〉の前場、シテ千手の化身が登場する場面の詞章であろうと考察している。[12]しかしながら、禅鳳が（ア）を「むかしうたひ」、後者を（イ）「千寿　むかしの能」とはっきり区別して記している以上、これら二つは本来異なる曲の［上ゲ歌］であったと考えるべきであろう。

田中允氏旧蔵『小うたい外』には〈昔千手〉という謡い物が収められている。[13]

昔千手

［サシ］ある時夕の雨ふりて、物すごかりし折ふしに、てごしの千手□に琴もたせ、かの御宿所に参り給ふ、其ま、夜遊の御徒然、御盃もたび〳〵成しに、千手御しやくをさしをきて、らきの重衣たる、情なきことをきふにねたむといふ朗詠をしたりければ、折から心もすみかへりて、かんるいをなすばかり也。

［クセ］其時中将のたまはく、此らうゑいをせん人をば、北野の天神の、一日に、三度かけつて、守らんとの御ちかい、げにたつとうぞおぼえたる。去ながら重衡が、今の身には、じよゐんしてもなにかせん、たゞざいしや

うの、かろんずる事ぞ〔ね〕がはしき。此事をきくからに、千手またこゑをかへて、十悪といふとも、ゐんぜうせんといふ、らうゑいを申ける。〈して〉極楽、ねがはん人はみな、〈地〉弥陀の、名号をとなふべしと、いまやうをうたひければ、其時重衡も、御さかづきをかたぶけらる。又琴引ならして、ごしやうらくをなしければ、重ひらが今はたゞ、ごしやうらくとくわんぜん、往生のきうをひけとなり、げに哀なる御心の、唯称一念に、かの国をお念じたまへや。

捕虜として鎌倉に送られ狩野介に身柄を預けられた重衡を見舞う千手が酒を勧めて朗詠をする場面であり、『平家物語』巻十「千手前」をなぞるような形で綴られている。伊藤氏はこの〈昔千手〉に関して

「昔千手」の詞章は、それがサシ・クセという章段であるからにしても、『平家物語』の文章をほぼ忠実に用いており、《千手》とは明らかに異なる。もしこのサシ・クセを含む完曲が存在するなら、前掲「煙見千寿」の詞章や『五音』所引の一句（クリであろう）をも合わせ持っていると考えて矛盾しないし、それは幽霊としての千手が重衡への恋慕を主題にした夢幻能であったかと想像される。このようなかたちの別曲が『五音』にいう「千寿」であるとすれば、そこに作曲者名なしに掲げていることからは、世阿弥の関与した曲であったということになる。

と〈昔千手〉に『五音』所引「千寿」や「煙見千寿」を合わせた形の世阿弥関係曲〈千寿〉を想定し[14]、天野氏も（ア）（イ）が世阿弥作〈千寿〉の前シテ（千手の化身）登場場面の詞章、『五音』所引「千寿」と〈昔千手〉は前シテが「重衡の物語」を語る場面の詞章であるとする。前述の通り（ア）（イ）は別曲であったと考えられるが、重衡の菩提を弔うため海道を上り奈良へと向かう千手の心情を切々と語る（イ）は確かに〈昔千手〉前シテ登場の段に相応しい。『能本三十五番目録』の冒頭から第十曲目にみえる「センシユ」が〈千寿〉であるならば、世阿弥から禅竹

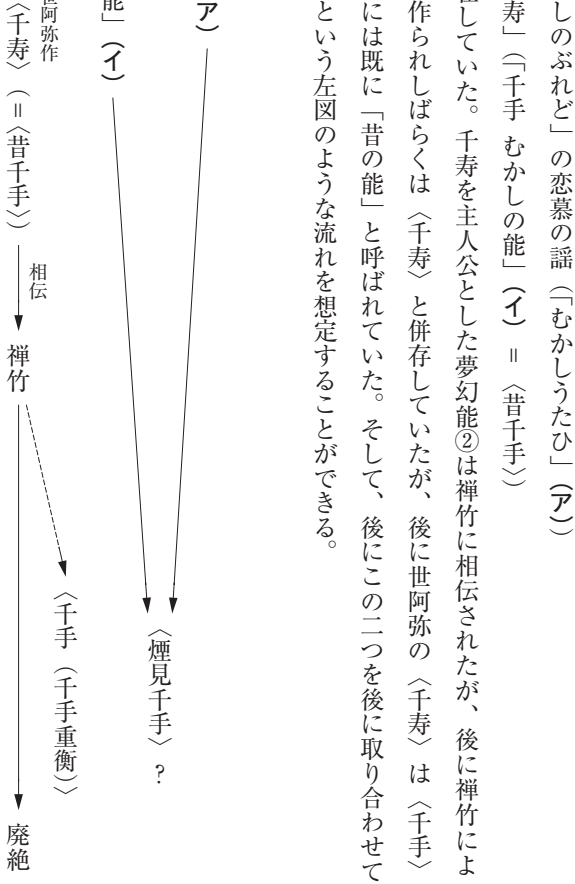
に一括相伝された曲の一つということになる。[15]

天野氏は世阿弥作〈千寿〉が「恋慕」をテーマとしたシテ一人主義の夢幻能であるのに対して禅竹作〈千手〉は千手とともに重衡にもかなりのウエイトがかけられた両ジテ的構想を持つ現在能であることから、両者は「改作」の関係ではなく同じ千手をシテにした別個の作品とみるのが妥当だとする。[16] 以上を総括すると、世阿弥時代には

①『五音』所収の「しのぶれど」の恋慕の謡（「むかしうたひ」（ア））

②『五音』所収「千寿」（「千手 むかしの能」（イ）＝〈昔千手〉）

の二つが並立して存在していた。千寿を主人公とした夢幻能②は禅竹に相伝されたが、後に禅竹によって現在能の〈千手（千手重衡）〉が作られしばらくは〈千寿〉と併存していたが、後に世阿弥の〈千寿〉は〈千手〉に取って代わられ、②は禅鳳の時代には既に「昔の能」と呼ばれていた。そして、後にこの二つを後に取り合わせて、謡い物〈煙見千手〉が作られた　という左図のような流れを想定することができる。



四、むすびにかえて

禅鳳自筆謡本や小謡本については十分に研究が進んでいるとは言い難い状況であるが、[17] 本発表で取り上げた二つの禅鳳自筆巻子本は、能作者として、そして謡の師匠としての禅鳳の姿を浮かび上がらせる生の資料としては勿論のこと、能作史研究においても非常に貴重なものといえる。特に、巻子小謡本の注記から『五音』所収〈千寿〉と禅竹作〈千手〉との関係や〈煙見千手〉の二つの［上ゲ歌］はそもそも別曲で禅鳳より後の時代に取り合わされた謡い物と判明したことの意義は大きい。原〈富士山〉の作意や成立の場、〈千寿〉と〈千手〉にみる世阿弥晩年の能と禅竹の能の作風の違いなど考えるべき問題も残されているが、この点については今後の課題としたい。

注

（1）伊藤正義「謡曲「富士山」考―世阿弥と古今注―」（『国文学　言語と文芸』11巻3号、1989.5）
（2）『風流能の時代―金春禅鳳とその周辺―』（東京大学出版会、1998）
（3）三苫佳子「世阿弥の能「富士山」」（『東海能楽研究会年報』第16号、2012.3）
（4）西野春雄「信光の能（下）」（『藝能史研究』51号、1975.10）
（5）新潮日本古典集成『謡曲集（下）』「矢卓鴨」解題
（6）（1）伊藤稿
（7）松岡心平「能と富士山―天女の舞の流れ」（『国文学　解釈と教材の研究』49―1、2004.2）
（8）三宅晶子「〈謡い物〉と『五音』」（『中世文学』24号、1979.6）
（9）西野春雄「謡曲改作史の一断面」『能楽研究』6号、1981）
（10）片桐登「『忍ぶれど』の謡について」（『観世』30巻12号、1963.12）

（11）岩波日本思想大系『世阿弥・禅竹』補注一二九
（12）天野文雄「世阿弥の《千寿》の輪郭」（『能楽逍遙（上）世阿弥を歩く』大阪大学出版会、２００９）
（13）（９）西野稿
（14）新潮日本古典集成『謡曲集・中』「千手重衡」解題
（15）竹本幹夫「『能本三十五番目録』考」（『観阿弥・世阿弥時代の能楽』明治書院、１９９９）
（16）（12）天野稿
（17）安岡充令・山本聡「形態と文字からみる室町期謡本―金春禅鳳自筆謡本の位置―（上）」（『専修国文』81号、２００７．９）、宮本淳子「金春禅鳳の用字法―『臨終書』・謡本の分析を通じて」（『東京女子大学紀要論集』63巻1号、２０１２．９）など